客観性を求める表現について

—日本語で論文を書く時の困惑—[1]

陳　力衛

【キーワード】
ネイティブチェック、「れる・られる」、「ている」、「ため」、誤用

【要旨】
本稿は、個人的な体験として、日本語で論文を書く際に困惑する客観的表現、すなわち「れる・られる」、「ている」、「から、ので、ため」に焦点を当てて、ネイティブチェックを受けた当該部分の問題点を整理し、関連表現をも考慮に入れて、その誤用とまで言えない気になる表現をどういう方向で改善していくかを考えてみた。結果、日本語らしさを求めすぎず世界の日本語に適用できるように、緩やかな共起ルールの設定をもって問題を解消させていくことを提案している。

1. はじめに

日本語を学習してから 40 年あまり経つが、未だに日本語で表現するときは自信をもてない。会話の場合は場の雰囲気と前後の状況でほぼ問題なく意思疎通を図ることができるが、文章を書くとき、意外と問題が多く、細かいところまでさまざまな指摘を受けている。ネイティブチェックを経た自分の文章を見ると、時々自信喪失に陥ることもある。

「確かに、日本語に熟達したほかの方々の書いたものを見てもやはり気になる点が多く、外国語に熟達しても文章を書くことが非常にむずかしいということを常に実感しております。」という、自分の文章を直してくださる大阪大学の田野村忠温先生の言が、慰めにも聞こえる[2]。

大学時代から今日まで多くの先生方が自分の拙い文章に添削の朱を入れてくださり、その原稿を捨てずに大切に保存している自分にとって、成長の糧となるだけでなく、時々思い出にもなるのだが、せっかくチェックしていただいた日本語をどう生かすか、直された所々を類別して日本語教育の一環としていわゆる正しい文章表現を目指す方向

---

[1] 本稿は 2023 年 1 月 27 日に埼玉大学で開催された国際シンポジウム「学術論文としての書き言葉の能力はいかにしてレベルアップできるか—日本語学習の経験者からの提言－」での発言内容をもとに書き直したものである。
[2] 田野村忠温先生からの筆者あての私信。

で一般化することが可能かどうかを常に考えている。それらを具象化するには、中国人学習者向けに『写好日文』（日本語文章を上達させよう）という一冊にまとめることができれば、自分のこうした経験をみんなで共有することができるのではないかと思う次第である。

自分の経験の中で、日本語で論文を書くとき、最初に指摘を受けたのは「ちょっと」から「すこし」へと改められたように、いわゆる口語的表現から文章的表現への切り替えである。副詞だけでなく、和語動詞から漢語サ変動詞へのシフトも時々注意されることがある。語彙レベルにおけるこうした指摘はわかりやすく、語彙量の増加によってすぐに改善できるようになるので、初歩的とも言えよう。しかし、文法レベルの「テニヲハ」となると、なかなかすんなりとはいかないものである。いまでも「は」と「が」の問題が常につきまとっている。それでもルールと文法を丁寧に勉強していれば、徐々に明らかな誤用を減らすことが可能であろう。日本語で論文を書く時の多くの問題点の中で一番困惑するのはいわゆる客観的記述を求める表現である。誤用とまではいかないものを含めて、なぜかネイティブの人に注意され、表現をチェックされるところが多い。

そもそも日本語において主観的・客観的ということを表す言葉が存在しているようである。従来知られているように、池上（1981）の「する」と「なる」のタイポロジーや、副詞を中心とした、渡辺（2001）の「わがごと」と「ひとごと」の視点からの論などがある。これら（たとえば、「ことにする」と「ことになる」、「みずから」と「おのずから」の類）も日本語教育の中で取り入れられていれば、一応、学習者（自分をふくむ）が学習を通して習得できるものと考えられる。したがって、日本語で論文を書く際に、まず主観的・客観的という言葉の選択が必要となろうが、それらを理解した上で、いわゆる客観的な記述を目指す際に、外国人にとってなおも困惑しているところがある。本稿ではそのいくつかを取り上げ、自分自身の例を交えながら考えてみようと思う。

2. 客観表現の定番「れる・られる」

荒木（1980）は「れる・られる」の意味関係を山田孝雄の「受身→自発→可能→尊敬」という発生のプロセスを挙げながら、同時にそれと異なる橋本進吉の説、「すべての意味は自然にそうなるという『自然動』の『自発』から発生した」という本源説を支持している。たしかに、上記のような主観的・客観的という視点で考えれば、まずは「自然動」の「自発」、いわば主観的なものがベースになるかもしれない。その意味で「れる・られる」の表現形態そのものがすでに最初から客観的な意味合いを帯びているので、本稿では敢えて「受身」という用語を使わない理由もそこにあるが、ただ、記述の便宜上、学界一般に使われている「受動態」を時々使うことにしている。

2-1　考えられる/思われる

文末思考動詞としての「思う」「考える」について森山（1992）の論考がある。氏はその動詞形のままでは、二つの異なる用法があると指摘している。つまり、（1）のよ

うな「話し手の主観的な思考内容を表す」ことがある一方、不確実表示用法として、（2）のように「事実として伝達すべきことに対して、話し手の個人的情報であることを断れば、それは無条件に聞き手に共有される確実な情報でないということになる」という。

（1）　日本の今の医療制度は間違っていると思う。（森山 1992）
（2）　先方は三時に来ると思います。（森山 1992）

前者に対して、「思う」から「思われる」へ変えると、（3）のように、話し手の個人の主観的な思考内容から大勢の人の共通認識へと変えられていく。しかし、森山氏の挙げた後者のような不確実表示用法ではそのような置き換えができない。（4）が非文となるのは「確実な情報でない」ことを客観的事実へと一般的に認定させるにはハードルが高いからであろう。

（3）　日本の今の医療制度は間違っていると思われる。
（4）　*先方は三時に来ると思われます。

（5）の下線部はもともとの自分の表現で、→のあとは直されたものである（以下同様)。「ものと考える」を加えることによって前のセンテンス全体を主観的な判断内容とするニュアンスが強くなる。書き手の意思表示がより鮮明になる効果もある。この主観的判断を和らげ、より客観性を増すような役割を果たすのは「考えられる/思われる」による文末表現である。

（5）　その利用経緯を明らかにすることは意義がある。→ものと考える。

たとえば、次の、「思う」「であろう」「かもしれない」のような主観的推断を、以下のように「れる・られる」形にすると、より客観的な記述となる。

（6）前述したように、メドハーストの英和の部を意義分類にしたのもじ狙いがうかがえると思う。→ものと思われる。
（7）そのことから見ればケンペルのメドハーストへの影響はほとんどなく、せいぜいローマ字表記を確かめるための参考に止まっているであろう。→たものと考えられる。
（8）あるいは『倭節用集悉皆大全』にある片仮名ルビはメドハーストにとって読みやすいものであったかもしれない。→と考えられる。

以下のような「わけである」という断定や、単に動詞の過去形表現（結果？）も「れ

る・られる」形にすることによってすこし和らげられ、大分、客観性がにじみ出る表現となった。なお、「考えられる」と「ものと考えられる」とを比べると、後者のほうがさらに断定を和らげるようにおもわれる。

（9）このローマ字表記と片仮名表記をそのまま借用したわけである。→と考えられる。

（10）「フィッセル本」のローマ字表記がメドハーストの『英和和英語彙』に継承され、英語の世界で広がっていった。→ものと考えられる。

2-2　「れる・られる」の過剰使用

ただ、そうした注意を受けると、自分が日本語で論文を書くとき、客観性を求めようと、何が何でも「れる・られる」へと仕立てたがる傾向が見られる。とくに論文では研究史や歴史的な客観的事実の記述に際して、この特徴が目立ってしまう。たとえば、（11）ではついついすべての動詞を「れる・られる」形にしてしまうが、二重取り消し線で直されたように、「全盛期を迎えた」「復興した」という能動的表現だけで十分であり、「れる・られる」が過剰使用となる。

（11）しかし、清代の考証学が全盛期を迎え~~られ~~た 18 世紀末から 1820 年頃までは古来の伝統的数学が再発見され、復興~~され~~した。

同様に（12）のように、自分では二つの動詞が続く場合、全部受動態にしてしまう。一つだけを受動態にすればよく、「理解する」という自他両用の可能な動詞において受動態の必要性はあまり強くないようである。

（12）このような文章を書く人は、日本語の文体や文法とはほとんど関係なく、中国語の作文がうまく、一語一語忠実に日本語に訳されている限り、容易に理解~~され~~し、尊敬されることだろう。

（13）はいかにもスタンダードな受動表現であるが、（11）、（12）に照らし合わせると、自他両用の「形成され」を「形成し」と能動的に直しても別に違和感があるとは思わないかもしれない。

（13）和製漢語とは日本語の中で形成され、作られた漢語を指している。

事実、「れる・られる」の過剰使用は次のような例にも見られる。

（14）そもそもドゥーフ自身が自筆稿本を持ち帰った際、「それは、蘭国王に献上

する積りであった」ことを『日本回想録』に書いていることからも、ローマ字本を一種の完成本と見な~~され~~てよかろう。→見なしてよいものと考える。

（15）序文の下線部~~を~~示~~され~~たように　→序文の下線部に示したように

（14）は「ローマ字本を」というヲ格があるから、能動的に直されたことを理解できるが、（15）はデ格とニ格の差によるものかどうかは判断しづらい。なぜなら、以下の（16）のように、ここではニ格と共起したものが逆に受動表現へと直されたからである。

（16）これは写本の表紙に書~~いた~~内容で→書かれた

これをどう解釈すればよいのか、（15）の「下線部に示した」のは書き手の私であり、（16）「写本の表紙に書」いたのは他人という「わがこと」と「ひとこと」が働いているために、（16）が受動的となるのであろう。

2-3　能動と受動とで共起関係が異なる？

単に動作主の行為かどうかという判断は時々しにくいものである。形態的に「れる・られる」と共起しやすい格の表現（傍点で示す）があれば、より分かりやすく説明できよう。

（17）横浜で発行された梁啓超主筆の『清議報』も、その第1冊（1898年12月）に**おいて**、ロシアの人口は「一百三十兆」で、平時の兵隊は「一兆」だが、戦時となれば予備軍を入れて　「二兆二十万」あると説明している。しかし、同じ『清議報』の第4冊（1899年2月）における日本の新聞報道の紹介**では**、ロシアの人口が「一億二千九百万人」とされている。

（18）モリソンの華英字典『五車韻府』（1815）**に**、「億」が十万、「兆」が百万と説明されているのはその反映である。20世紀に入ってからの『商務書館英華字典』（1906）**でも**同じく、兆＝百万という理解が続いている。

（19）さらに、中国の人口を「四百兆」といいながら、『清議報』第1冊の発刊の辞**では**「支那四万万同胞」と、新たに「四万万」という言い方を使い出している。→されている？

（20）執筆者のWについて、八耳（2005）**では**「『中国叢報』の編集者サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズと考え~~られる~~→ている。

（17）では「において」が能動的な「説明している」と共起する一方、「では」が受動的な「されている」と共起している。しかし、（18）では反対に、「に」が受動態、「でも」が能動態と共起している。（19）でも「では」と能動的表現、（20）では「で

は」を受動的表現と共起させるべきかと思うと、結局、能動態と直された。

事実、板井（2021）で挙げられた以下の（21）～（24）のうち、「では」と共起する（21）～（23）は能動も受動もどちらとも共起可能となっている。

（21）大谷（1995ｂ）では，（中略）ヲ格においてヲを付けるよりも，無助詞格が自然になる場合があることが指摘されている。（坂井 2021）

（22）大谷（1995ｂ）では，（中略）ヲ格においてヲを付けるよりも，無助詞格が自然になる場合があることを指摘している。（坂井 2021）

（23）第４章では、海外における動機付け研究の問題点を指摘した上で、中国における動機付け研究について論じた。（坂井 2021）

（24）○○によると、「～」は第三者が動作主の行為を客観的に陳述するために使われるという。（坂井 2021）

氏の説明によると、（21）、（22）のいずれも、「が」格と「を」格の別はあっても、能動態、受動態との共起が可能である。しかし（23）の場合は「論じた」のは筆者であるため、能動態を使用する。一方、（24）の場合は主題が非生物主であるため、受動態となるという。

こうしたことからみれば、いわば共起できる束縛のルールがあまり効かないように見えるが、以下の例のように、「は」は能動態、「では」は受動態の使用が多いのも事実である。

（25）イギリス宣教師ホプソンの『博物新編』（1855）巻三「万国人民論」は、合計天下人民大約有九百兆（一百万為一兆）之数と、当時の世界人口がおよそ「九百兆」であると述べ、兆が百万を表すことを括弧内の注で説明している。

（26）日本では、江戸時代の 1627 年（寛永 4）に明の程大位の『算法統宗』（1593 年）を参考にして著された『塵劫記』の初版において初めて大きな数が登場する。

（27）ここでは「億」に二通りの意味があると説明されている。

このような場合、日本語学習者に対してどのように説明すればよいのか。庵（2016）の提唱している「やさしい日本語」を目指すなら、ここでは「は」は能動、「では」は受動との共起関係をより明瞭に（あるいは推奨的に）規定すれば、論文を書くときの困惑を一つ減らすことになるであろう。

3. 客観表現のいろいろ

上記「れる・られる」以外にも、さまざま客観表現を挙げることができる。たとえば呂（2010）が取り上げた無意志自動詞表現、いわば広い意味での動詞の自他の問題や、

「という」と「とある」の文末表現なども常に気になるが、ここではやはり自分の書いた日本語の論文の中でよくネイティブチェックをされる二つの表現を中心に見ていきたいと思う。

3-1　「ている」の客観性

谷口（1997）はテイル形の 3 つの性質（客観性、現象描写性、報告性）について、ル形との対比から考えるものである。たとえば、「彼はそう思っているよ」というセンテンスに対して、テイル形に主観的な動詞を客観化する機能を認めたものであると主張している。確かにその 3 つの性質（客観性、現象描写性、報告性）はいずれも客観表現として馴染みやすいものである。

（28）その後、書簡では「シーボルト事件の影響」について頁を割いて説明してい~~た~~→るが、本稿では紙幅の関係で別稿に譲ることとして、
（29）もう一つの言い方「うはばみ」について、ケンペルのほうはハ行転呼音で wa を使っているのに、メドハ-ストは字面通りに ha とし~~た。~~→ている。
（30）寛政版『頭書増補訓蒙図彙大成』（1789）では「いばらしやうび」を一語と見たて~~たものである~~。→ている
（31）八耳俊文（2005）「入華プロテスタント宣教師と日本の書物・西洋の書物」では 19 世紀半ばごろ中国へ渡った日本の書物を扱ってい~~た~~。→ている。

つまり自分の文章でよく使う「た」よりは直された「ている」の客観性が強い。なぜ「た」の使用を好むかについて、板井（2021）では、以下のように説明されている。

> 市川（2010）によれば、「ている」の習得には時間がかかるため、「ている」を正確に使えず、「た」で代用してしまう学習者が多いという。……この誤用が論文において非常に多く出現する理由は、中国語の場合、過去形のマーカーである“了”が動詞に後接するため、その影響を受けて、「た」を用いてしまうからだと考えられる。（坂井 2021）

上記のように、その理由を中国語の「了」による母語干渉に求めている。ただ、自分の感覚では「た」は事物の記述完了を意味するから、それ自体がすでに一種の客観性を持つようになっていると考えている。逆に「ている」をあくまで進行形と捉える自分は、ほとんどその「客観性、現象描写性、報告性」の三つの特質を認識できていなかった。この穴をどうやって埋めていくべきかを考えなければならない。一方、板井（2021）の指摘している「る」と「ている」の混同は自分の文章には少なかった。

3-2　「から」<「ので」<「ため」の客観性

今尾（1991）で紹介された、「から」は主観的接続機能を、「ので」は客観的接続機能を持つということは日本語学習者にとってもほぼ既知の知識とされている。そして氏は願望の「たい」には「から」と「ので」は共起するが、「ため」は共起しないことなどから、次のようにまとめられる。

（32）「から」：主観的要素にも客観的要素にも使用可能な接続形式
「ので」：客観的要素が含まれていれば使用可能な疑似客観的接続形式
「ため」：主観的要素が含まれていると、使用不可能な客観的接続形式

従来、「ので」は客観的接続機能を持つとされてきたが、「ので」よりも「ため」のほうがさらに客観的な接続形式と考えられるという。したがって「から」<「ので」<「ため」のように客観性が逓増していくのである。

中国語を母国語とする筆者は日本語を書くときに、一番多く使っているのは「から」で、上記の説明のように「主観的要素にも客観的要素にも使用可能」なため便利である。しかし、（33）、（34）のように、ネイティブチェックでは「から」を取り消して、より客観的な接続形式を有する「ため」に替えられている。

（33）なぜ最終的に意義分類の英和の部に落ち着いたかというと、日本語の単語を収集する際に、すでに既成の辞書で共通の意義分類の枠があった~~から~~→ため、援用する形になってしまったのであろう。
（34）初版にあたる寛文版『訓蒙図彙』のような、楷書の漢字と平仮名交じり文に比べて、三版にあたる寛政版は草書体の漢字と平仮名交じり文~~だから~~→のため、日本語の初心者であるメドハーストにとってカタカナによる注釈の書物が必要とされてくる。

さらに、強い理由づけを表す文末の「からである」がある。（35）のように、より客観的な表現とされる「ことになる」に取って替えられた。

（35）実質出島にいる時間がさほどなかった~~からである~~。→ことになる

「から」に比べて、「ので」から「ため」へ直された例は少ないようで、むしろ、それに合わせるために、（36）のように文末がより客観性を有する受動態へと直されていた。

（36）ただ、メドハーストは「シカ」「ブタ」「ムマ」「ウシ」「イヌ」「ネズミ」など、同じ後接要素の持つ語構成を一緒に並べていく傾向が見られるので、

順序の調整がどうしても~~出てくる~~。→行われている。

そうした「から」から「ため」へのシフトが目立つと、自分としてはやはり過剰使用に走ってしまうことがある。たとえば、(37) のように、後接表現の「贅言しない」には明らかに主観的意思が感じられるために、「ため」が不適切となり、「ので」と直されたわけである。

(37) メドハーストの経歴及び彼の日本伝道への志については、すでに陳（2017）で述べた~~ため~~→ので、ここでは贅言しない。

ほかには「ため」の体言止めの見出しでの使用や、「寝不足のためか頭が重い」のような「ためか」の形、いずれも「から」「ので」に代替できない場合である。

4. おわりに

以上、非常に個人的な文章体験に基づいて、自分の日本語表現の拙さを披露しながら、いわゆる客観性を求める表現をする際の問題点や困惑を取り上げてきた。すべての例文のネイティブチェックについて完全に説明できるまでには至らなかったが、せめて実例を提供する意味で日本語教育に少しでも役立てれば幸いだと思う。

遠藤織枝先生は次のように話す。「特に外国の方が日本語で書く場合に、どこまで日本語らしさを要求すべきかとなると、これも主観的になります。むしろ、日本語を広く使ってもらうという意味ではいわゆる「日本語らしさ」が弊害になる場合も出てくるかもしれません。「やさしい日本語」と同じで、レベルによって要求水準にも段階をつけるということになるのでしょうか。」[3]

たしかに当日のシンポジウムの会場から私の提示したネイティブチェックされた表現について、直しすぎという意見もあった。また、遠藤先生の言葉に賛同し、「世界のための日本語」を目指すべきという意見もあった。

ただ、いわゆる「日本語に熟達した」自分は、以上の問題提起とともに、その改善の可能性があるかを考えなければならない。なぜなら、大学時代に日本語を習得してからほとんど進歩していないのではないかと危惧しているからである。そこで今回の経験を踏まえて、改善する方向として 2 点提案したい。1 点目は少なくとも日本語専攻の教科書において、ここで取り上げた客観表現に関係する三パターン「れる・られる」、「ている」、「から、ので、ため」の問題点を整理し、箇条書きとして列挙しておくことである。もう一つは「やさしい日本語」または「世界のための日本語」をめざすにはより緩やかな表現ルールを確立させる必要があるのではないか、ということである。

[3] 今回のシンポジウムでの発表内容を遠藤先生に知らせた後の筆者あての私信。

参考文献

荒木博之（1980）『日本語から日本人を考える』朝日新聞社
庵功雄（2016）『やさしい日本語―多文化共生社会へ―』岩波書店
池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
板井美佐（2021）「中国人上級日本語学習者の博士論文における誤用の傾向・要因と指導方法―中国語を母語とする大学院生の調査から―」『城西国際大学大学院紀要』24
今尾ゆき子（1991）「カラ、ノデ、タメ―その選択条件をめぐって―」『日本語学』10-12，明治書院
谷口秀治（1997）「テイル形の 3 つの性質（客観性、現象描写性、報告性）について―ル形との対比から―」『広島大学留学生センター紀要』7
森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって―文の意味としての主観性・客観性―」『日本語学』11-09，明治書院
劉志偉（2022）『学習経験者の視点から見た日本語教育文法―ニア・ネイティブレベルを目指すために―』日中言語文化出版社
呂雷寧（2010）「無意志自動詞表現と「V る＋ことがある／ない」との比較」『言葉と文化』11
渡辺実（2001）『さすが！日本語』ちくま新書

（成城大学経済学部教授）